



前田青邨画伯「洞窟の頼朝」

鎌倉樂しむ会 史跡散策資料

『北条義時物語』 (上)

鎌倉幕府の執権制度を確立した男

*参考文献

鎌倉観光文化検定テキスト

武家の古都、鎌倉 山川出版社

承久の乱 文春新書 本郷和人

北条義時 吉川弘文館 安田元久

中世社会のはじまり 岩波新書

五味文彦

一冊でつかむ日本中世史 平凡社

武光誠

鎌倉樂しむ会企画責任者

清藤 孝 編

北条義時の誕生

平安時代の末期、平治元年（1159）十二月に勃発した「平治の乱」は平氏と源氏の覇権争いも絡み、平清盛が棟梁の平氏が勝利を握った。敗れた源氏の棟梁・源義朝は再起を図るため鎌倉を目指したが、途中、尾張国で謀殺されてしまう。

一方、三男の源頼朝は父・義朝と一緒に奮戦したが、雪中逃走の途中、平氏に捕らわれてしまう。京に送られたが、「池禪尼」に救われ、斬首を免れ翌年の永暦元年（1160）二月に伊豆蛭ヶ小島に配流され、その土地の豪族・北条時政の監視下になった。頼朝十四才の時のことです。

この時、のちに鎌倉幕府の基礎と安定に努力した尼將軍政子、すなわち頼朝の夫人となる北条政子は、まだ七歳であった。

それから三年後の長寛三年（1163）には北条時政の三男として北条義時は誕生した。長ずるに従って、源氏の棟梁となった源頼朝が在地武士の工藤茂光、土肥実平、岡崎義実、

天野遠景、加藤次景廉ら^{かとうじかげかど}を従えて、山野を駆け巡っている姿に、兄・北条宗時とともに強い憧憬と親しみを持つようになってきた。

義時の生まれた頃、京都の政界では、平治の乱に勝利した平氏一門が、平清盛を中心として益々隆盛を誇っていた。平氏一門は、中央政治の主要ポストを次々と占めていった。そして、平治の乱の時には敵対した貴族たちの荘園を取り上げ巨大な荘園領主となるとともに、源義朝に従っていた源氏系の地方武士も傘下に集め、我世の春となった。

さらに、清盛及びその一門は官位の昇進を急ぎ、清盛は応保二年（1162）には従二位になり、仁安二年（1167）には一躍太政大臣となった。また、嫡子・重盛も安元三年（1177）には正二位内大臣になっている。

その他一門の主たる者も官位を上げ「一門の公卿十六人・殿上人三十余人」と言われるほど、その権勢は一世を風靡した。

この平清盛が内大臣になった時には、北条義時は十五才であった。

源頼朝の旗挙げの背景

平氏の専横化が進むと朝廷への政治介入も、院政の勢力と対立することも目立つようになってきた。また、信仰の力を背景として、侮り難い政治力を発揮するところの南都北嶺（興福寺・比叡山延暦寺・園城寺）の勢力は、僧兵という特殊な兵力を擁するだけに、その操縦も容易でない。平氏が政治の中心になれば、この寺院勢力との交渉に悩まされる。頼朝が立ち上がる十年前の承安年間（一一七〇年代）になると、中央政界では、平氏一門の勢力と、院の近臣の勢力、及び寺院の勢力の三つが、相互に複雑な利害関係の渦の中に捲き込まれていく。

治承元年（1177）には、有名な「鹿ヶ谷事件」があり、院の近臣による平氏討伐の陰謀が暴露され、平氏はいよいよ院当局との対立となるのです。また、この年には、親平氏派の天台座主・明雲が罪を問われ所領を没収されたうえ伊豆に流罪にされることになったが、その道中において延暦寺の僧徒のために

奪回されるという事件が起こっている。

かくて京都を舞台にして、治承三年(1179)十一月には、清盛のクーデターが行なわれ、後白河法皇を鳥羽殿に幽閉する事件があり、ついで法皇奪回のため、園城寺・延暦寺・興福寺の衆徒が、従来のお互いの対立をすてて団結し、政治の主導権をめぐる争いは表面化してきた。

そしてついに治承四年(1180)五月には、園城寺の衆徒勢力を背景に、以仁王もちひとおう及び源頼政による平氏討滅の烽火のろしが上がったのです。伊豆一帯は俄かに騒然としてきたようです。以仁王の令旨をうけた頼朝のもとに、京都きょうとから下河辺行平の使者が来て、近々源氏追討のことが計画されており、頼朝が第一目標とされていることを報告し、万全の用意あるべきことを促している。

また六月には、時勢の動きを察した三浦義澄・千葉胤頼らが、京都から頼朝のもとに参向している。そして、頼朝は六月末に、安達盛長・小中太光家こちゅうだを使者として、平家追討の名義で源氏累代の家人を召集しはじめたと

いう。

石橋山の合戦(義時十八才)

頼朝の平氏追討の烽火は、治承四年(1180)八月十七日、折からの三島神社の祭礼の夜、妻・政子と娘・大姫を伊豆山権現へ匿い、まずは伊豆目代の山木兼隆を討滅して緒戦を飾った。

そして、相模の豪族三浦一族と合流することを期待し、北条時政・宗時・義時以下三百騎を従えて、石橋山に陣を敷いた。

この頼朝に敵対する大庭景親は三千騎、伊東祐親は三百余騎を率いて、三浦一族が頼朝軍に馳せ加わる前に一挙に勝敗を決しようとして二十三日夕刻から激しい暴風雨について攻撃をしかけてきた。

兵力の決定的な差はいかんとみえず、頼朝軍はもろくも敗れ戦死する者も多く、また生存した軍兵もほとんど分散し、頼朝は僅かに土肥実平以下数人を従え、箱根山別当の行実の援けを得て、途中、大庭景親の家臣・梶

原景時の見逃しもあり、二十四日の夜にまぎれて箱根山中に逃げ去ったのである。

北条時政・宗時・義時の父子も奮戦し、頼朝の逃れるのを援護し、一時離散した。この石橋山の合戦は、頼朝の挙兵に将来の運命のすべてを賭けた北条一門にとって危急存亡の時であつたが、残念ながら長兄・宗時は戦死してしまう。そして、時政、義時は甲斐国に赴こうとしたが、頼朝の逃げた梶山の陣に行き着いた。

頼朝は土肥実平の案内で、二十八日に真鶴崎から船に乗って、二十九日安房国の平北郡(現安房郡)の狺島りょうがしまに上陸した。安房に赴いた頼朝は、安房住人・安西景益に参向を命じ、また、和田義盛、安達盛長つねたけを使者として、上総国平広常、千葉常胤つねねに援助を求めた。

頼朝は、これらの上総・下総の武士団をはじめ、武蔵の武士団も大きく統合組織し再挙をはかり、安房から陸路をもって鎌倉を目指し九月十三日に安房を出、十七日には下総国に入り、十九日に上総広常が二万騎を引きつ

れてきた。十月二日には武蔵国に進み、ここで足立遠元・豊島清光・葛西清重に迎えられ、十月四日には畠山重忠・河越重頼・江戸重長らに従えることとなった。

そして、十月六日には鎌倉入りを果たした。十二月には、新築の大倉御所（現在の清泉小学校校地）に移り、関東の武士たちから「鎌倉の主」（『吾妻鏡』）と仰がれた。

安房に上陸してから、約一ヶ月の間に、再挙の目的を果たした頼朝であるが、その時には北条時政・義時父子は、甲斐、駿河地方に至り、この地の源氏勢力の組織に奔走していたものと思われる。

この頼朝の鎌倉入りの報に接した平清盛は、すぐに平維盛を総大将として二万の大軍を東国に向かわせた。これに対し頼朝は、鎌倉から黄瀬川に出陣し陣を構え、平家を富士川で迎え撃つ体制を整えた。（この時、奥州平泉から源義経が馳せ参じる）

そこへ北条時政・義時及び信濃源氏が参戦してきたので、平氏軍は殆ど戦わずして敗走

してしまう。頼朝は、ここからさらに進撃することはせず、直ちに鎌倉に引き上げた。

そして、十一月には常陸の佐竹義正・秀義を攻撃し、翌治承五年（1181）正月頃、関東をほぼ制覇することになった。義時は、この頃から父時政から独立し御家人として扱われるようになる。

頼朝は十一名の「寝所近辺祇候衆^{しこう}」を設け、その筆頭に義時は名を連ね、十九才となった義時は、北条の嫡男として頼朝が信頼する側近の御家人になったのです。

源平の合戦

頼朝が鎌倉幕府の確立に専念していた頃、木曾で挙兵した源義仲は、信濃・北陸方面を支配下に置き、次第に京都に攻め上げてきた。これに対し平氏の側では、治承五年（1182）二月平清盛が病死するというアクシデントが起こった。すぐに嫡子・宗盛が平氏一門の棟梁となり、京の都・西国方面地盤を固めることとしていた。

寿永二年（1183）二月、平維盛率いる大軍は加賀・越中国境の俱利伽羅峠で義仲軍と戦ったが惨敗し敗走してしまう。勝利した義仲軍は、この年七月京の都に攻め入り、平氏は都落ちしていった。京の風習の皆無な義仲軍の乱暴狼藉には後白河法皇の不評を買い、頼朝に対し法皇から上洛の要請が出された。

しかし頼朝はこの要請には応ぜず、東国支配の強化に務めるとともに、京の政局の動きに注意していた。

そして、義仲を牽制するため、弟・義経に若干の東国武士をつけて伊勢・美濃の方面に進出させていた。いずれ動き出すであろう東国御家人の大部分は鎌倉あるいは、夫々の本拠地に待機していた。

寿永三年（元暦元・1184）正月、いよいよ頼朝は木曾義仲追討の大軍を動かし、弟の源範頼を総大将にして率いさせ、上洛し一挙に義仲を討滅してしまう。

勢いつく関東の大軍は、すぐさま二月には、その頃再び勢いを盛り返して京都に迫ってきた平氏の軍勢を摂津（兵庫県）一の谷に攻

撃し、義経軍の大活躍もあり、これを海に追い返してしまう。

しかし、この戦いの記録には、北条時政・義時の名は見当たらない。義時においては、鎌倉を動かない頼朝の側近にあつて、この軍勢には加わらなかったと思われる。

一の谷合戦に敗れ逃れた平氏一門は、再び屋島・長門の彦島に集結し陣を張り、反撃の機会を狙っていた。

一方、頼朝は一の谷合戦の後、約半年間、着々と追討の準備を進め、活躍した範頼に対して、元暦元年（1184）八月、再び征西を命じたのである。頼朝は稲瀬川あたりに機敷を構えて、この征討軍を見送ったという。

この征西軍には、足利義兼・武田有義・千葉常胤・三浦義澄・八田知家・葛西清重・結城朝光・比企能員・和田義盛・安西景益・天野遠景など有力御家人の殆どが加わり、北条義時もその中の一人となった。

九月に京都を発した範頼軍は、安芸（広島）から周防・長門（山口県）へと進み、これまでも平氏に属していた西国の武士を帰順させ

ながら西下していった。

しかし、平氏軍の抵抗も厳しく、兵糧の確保も困難を究め、しばらく長門の地に滞留を余儀なくされていたが、元暦二年（1185）正月二十六日、豊後（大分県）の豪族阿南惟隆、（これひで）緒方惟栄などが八十二艘の兵船を献じ、また周防の住人・宇佐那木遠隆が兵糧米を献じたことよつて、範頼軍は辛うじて豊後国に進発することができたのである。

豊後国には、北条義時が下河辺行平・渋谷重国らと先陣となつて上陸し、葦屋浦において、小式種直の軍と合戦し、これを討ち取つて豊後国一帯を制圧した。（しょうにたねなお）

一方の義経軍は、範頼軍が苦戦してようやく豊後国に渡り、平氏軍の背後を制圧した頃の二月十八日に摂津国渡辺を進発した。

そして平氏の根拠地・屋島を背後から急襲し、これを一気に海上に追い落とししてしまった。

それから、義経は約一ヶ月間を海戦の準備に取り掛かり、やがて三月二十二日に進発し瀬戸内海を壇ノ浦の平氏の拠点・彦島を目指

し舵をきつていった。

彦島に主力の陣を張つた平氏軍は、背後の九州はすでに、範頼軍に制圧されており、もはやこの地で決戦をしなければならず、海上を追撃してくる義経軍と三月二十四日、長門壇ノ浦の海上で衝突し、義経軍の巧みな作戦が効を奏して、平氏軍は敗れ、栄華を極めた平氏一門の多くは壇ノ浦の海底へと沈み、ついに平氏一族は滅亡していくのです。

源平争乱の屋島、壇ノ浦についての立役者は、終始舞台の正面で大活躍したのは源義経であった。義経軍が瀬戸内海を舞台に華やかな脚光を浴び、そこに繰り広がる平家一門のもの悲しい物語も、諸本、歌舞伎、講談などに現代まで演じ語り継がれている。

しかし、この主役の活躍を舞台裏で助けたのは、九州を固めた義時も加っていた範頼軍の活躍であった。

この九州制圧は戦略上の重要なことであるが地味なことで、戦場で武威を輝かすことはないのであるが、義時は常に範頼軍の中枢

部にあつて、今後の頼朝の御家人としての役割を学んだことと考えられる。(二十三才)

将軍頼朝が政治家として武家政治の創設という偉大な功績を立ち上げ、その面で高く評価されるにもかかわらず、頼朝が武家の棟梁にふさわしい武勇を示した記録は、その一生を通じて、石橋山の旗挙げの際に、平家方の大庭景親・伊東祐親軍と一戦を交えたことのみに見られるだけである。

それとまったく類似するのが義時であつて、有力な御家人でありながら、ついに武威を輝かした記録は残していない。政治家としての側面こそが義時の本領であつたことは、その後の義時の行動が端的に物語っている。

頼朝と義時

頼朝は平家滅亡に大功労のあつた範頼軍は帰参させ鎌倉に凱旋してきた。義経は幼い頃の京都育ちを買われてか京都守護のため京に住することになった。

ところが、義経は後白河法皇の策略にかか

り、官位を下賜(従五位下・左衛門少尉など)

され拝戴してしまう。これが、将軍頼朝の武家政治確立の障害に当たするため、頼朝は義経を排除する行動を起こし、ついには文治五年(1189)四月義経は匿われていた平泉衣川の館を藤原泰衡に攻められ自刃してしまう。

そして、頼朝は、義時も名を連ねる有力御家人を従え平泉に進軍、その泰衡も同年八月、滅ぼしてしまう。

奥州征伐が終わつて、頼朝による一応の全国統一が完成した時、北条義時は二十七才になつていた。義時の青年期の大部分は、治承・文治の内乱期の間に経過したのであつた。

また、頼朝は、武術訓練を目的に、建久四年(1193)五月、富士の巻狩りを大々的行つた。この訓練の最中に有名な曾我兄弟事件が起こる。その時、北条時政・義時も陣中にいたが将軍頼朝も事件に巻き込まれたという誤報が鎌倉の政子のもとに届く。それに対し留守居役であつた平氏壊滅の大功労者の範頼は「わたくしが居るから大丈夫です」と

政子に答えた。この言葉が謀反と捉えられ、三ヶ月後の八月、範頼は無残にも伊豆で誅殺されてしまう。

さらに、建久五年(1194)、頼朝の武家政権設立に貢献した甲斐源氏・安田義定は子息・義資よしすけの少しの女性問題を謀反と捉えられたのか、義定・義資父子を所領没収の上誅殺してしまう。

このように義時は、頼朝の挙兵の初めからこれに従え、頼朝が鎌倉に落ち着いた後は、殆どその側近にあつて、とくに西海の平氏との合戦を制して鎌倉に帰参してからは、常に頼朝の政治的行動に接し、その政治理念を聞く機会にめぐまれ、陰険とまで見られる政治的策謀の能力を肌身に植え付けられたと考えられる。そして、頼朝が抱く武家政治の理想が、強く義時に与えたことと思われる。

また、義時は、頼朝に近侍して、頼朝の性格あるいはその性癖までも何らかの形で吸収していたものと考えられる。

建久六年(1195)二月、頼朝は政子以下家

族を同伴して、二度目の上洛のため鎌倉を出発した。目的は源平争乱に捲き込まれ、平氏によって焼かれた東大寺の再建復興供養が主なものであったが、また、義時を含む関東の御家人は京の都に威風堂々の旋風を巻き起こした大行列でもあった。

義時は三月十二日、東大寺供養はもとより、三月二十七日の参内の際にも、また四月十五日の石清水八幡宮社参の際にも、頼朝の随兵として供奉している。そのほか、頼朝の京都滞在中には、義時はつねに頼朝の出入りに供奉している。

この度の頼朝の京都滞在は四ヶ月に及んだ。そして、今は亡き後白河法皇との政治的駆け引きも目の当たりにしてきた義時であったが、さらに頼朝に供奉しながら、現実在京の場所に於ける公家社会の空気に触れ、鎌倉幕府に協調的な京の朝廷勢力と反幕府勢力も感じ取ったことであろうと思われる。

頼朝は四ヶ月にわたる京都滞在を終え、入洛との際と同じ供奉をととのえて、六月二十五日に京都を離れ、鎌倉に向かった。義時は

京都に在って、数々の儀式や緊張した政治的交渉に終始した場面に供奉し、そこから得たものは後年の政治家義時の糧としてまたとない機会を得たことと思われる。鎌倉への帰参は、翌七月八日であった。

丁度その時、義時が京からの途次、相模国の御家人稲毛重成に嫁いでいた妹が七月四日他界したとの報に触れた。頼朝に従って、一応所期の目的達成への責任ある供奉に満了した心境であったが、その帰途での妹の死は、先に石橋山の合戦で兄・宗時を身罷って十数年の歳月は去り、その悲しみを乗り越えて、いまや北条一門は隆盛の道を辿っている。その時期とはいえ、妹という一人の同胞を失った悲しみは、京都供奉の達成心境と絡み合い、人間の宿命というものを大いに考えさせられたことであろう。

頼朝の京都訪問の直後、幕府はその後始末など多忙であったが、義時は七月十日から翌八月十三日までの間、父時政とともに伊豆に下って喪に服したのだった。この時、義時三十四才の壮年に差し掛かっていた。

そして喪が明けてからは頼朝の幕府政治に関わり、つねに頼朝の側近として活躍していたと考えられるが、ここから三年間は鎌倉の史書「吾妻鏡」には欠落してはつきりとしたことはわかりません。

正治元年（1191）正月十三日鎌倉に驚愕の事件が起こった。それは將軍頼朝の不慮の死であった。その死因は稲毛重成が亡き妻の追善供養のために相模川の架橋落成に臨んだ頼朝が、その帰途に落馬したためと言われている。義時は妹の冥福を祈る儀式を終え、そしてその帰途に不慮の災難が待ち構えたとは、御家人の間にも大きな動揺と同時に義時に対してはこれも大きな疑惑を持ったという。頼朝の落馬は全くの偶然の出来事であったが、また急病の発作であったかもしれないが、頼朝の死は事実として伝わり、その後の鎌倉幕府政治には一大転換期が訪れることになりす。それと同時に、北条義時にとっても、その生涯の上で、また新しい道が開けてきたのである。